



避難場所の金刀比羅神社に向かう住民

変化

津波避難訓練に表れた意識

1.7倍意識が数字に
悲しい犠牲を一人として出さないために。

市は明治三陸地震津波（1896年）が発生した6月15日、大津波警報を想定した津波避難訓練を沿岸地区の住民を対象に実施しました。

訓練では、昨年度開催した住民ワークショップの結果や、東日本大震災での被害状況を踏まえ、避難場所と避難経路を一部修正。今回、津波が川



200人以上が避難した金刀比羅神社

幅広い世代に浸透
金刀比羅神社を避難場所とする湊町・源道地区では、市消防団第2分団と久慈湊地区自主防災会が協力しながら、熱のこもった訓練を展開。防災行政無線が大津波警報の発表を知らせると、地域の人たちは真剣な表情で次々と避難場所に向かいました。

例年に比べ、特に目立ったのは小・中学生。避難者数は

200人を超え、避難場所があつという間に人で埋め尽くされました。閉会前には、過去の津波と今回の大震災の犠牲者に黙とう。参加者は津波の恐ろしさと、避難の大切さを胸に刻み込みました。

家族で避難した70代女性は意識の変化を口にします。

「3月11日は本当に怖かった。あんな津波は今まで見たことがない。今日もすぐに家を出てきました。でも一番変わったのは子どもたちです。ひ孫は普段から避難に備えて持ち物を準備していますし、今日も手を引いて避難場所まで連れてきてくれました」。

恐ろしい経験を機に、津波に対する心構えは、子どもから高齢者まで幅広い世代に浸透してきています。



助け合いが絶対に必要

市消防団第2分団 **中平高男** 分団長

震災時も避難が早く、人的被害がなかった久慈湊地区。今回の訓練で、さらに意識の高まりを感じました。ただ災害はどんな状況で起きるか分かりません。避難時も、助け合いが絶対に必要です。

緩めない警成心

いつ来るか分からない

久慈湊地区自主防災会 **村上雅夫** 副会長

昔から津波の危機意識が高い久慈湊地区。わたし自身、小さいころに聞いた津波の話が心に残っています。いつ来るか分からない津波。これからもしっかりと備えを考えていかなければいけません。



消防団第9分団 **廣崎三正** 班長

避難に必死の叫び
津波が推定27層も遡上した久喜地区。地震後、市消防団第9分団は川戸道達三分団長の指示を受け、すぐに水門を閉鎖し、必死に避難を呼び掛けました。

同分団の廣崎三正班長は振り返ります。

「皆、助け合って避難していました。足が不自由な人など以外は、ほぼ徒歩だったので避難路もストンプしませんでした。ただ防

避難徹底さらに必要

市消防団第9分団 **川戸道達三** 分団長

潮堤は越えないと思つたのでしよう。呼び掛けてもなかなか避難しない人もいました」。地震発生時、会議で市漁協にいた川戸道分団長。久喜に到着したとき、高台から津波の第一波が見えたといいます。

「防潮堤には人の姿。死なせたくなかった。必死に叫び、無理矢理避難させました。直後、津波が防潮堤を5層以上越えて襲ってきました。これまで8〜9層の高波が来ても無事だった防潮堤。今回は過去の経験がまったく当てはまらない津波でした」。

訓練が被害を防ぐ

紙一重で人的被害を食い止めた久喜地区。川戸道分団長は、その要因を分析します。

「人的被害を防げたのは避難訓練の成果だと思えます。ただ、すぐ逃げなかつた人がいたのも事実。一つの教訓です。地震が収まつたらすぐ避難することを徹底しなければならぬと思います」。

避難徹底。痛感したのは消防団員だけではないはずで

Case1 久喜地区



あの日、各地区ではどのように避難をし、何を感じたのか—
久喜地区と、久慈国家石油備蓄基地の避難状況について伺いました



Case2 国家石油備蓄基地

直ちに指示・避難

管理棟を除く全ての地上施設が津波で破壊された久慈国家石油備蓄基地。すさまじい被害の一方、勤務していた55人全員が被害を免れました。

大津波警報の発表後、直ちに構内放送で避難指示。職員は石油を貯蔵する地下岩盤タンクの防潮扉を閉鎖し、社用車への相乗りと、徒歩の2手に分かれて半崎集会所へ。重要施設の安全管理を全うした上で、15時10分までに全員が避難を終えました。

意識さらに高まる

同基地事務所の青山正幸所長は振り返ります。

「無事だったのは積み重ね



積み重ねた訓練の成果

久慈国家石油備蓄基地事務所 **青山正幸** 所長

てきた避難訓練の成果です。職員は異動で入れ替わりも激しい。全員の意識を高めるためにも訓練を続けることは重要です」。

今後の津波を想定し4月28日には早速、避難訓練を実施。避難完了は過去最長の6分30秒を記録しました。

日本地下石油備蓄久慈事業所の大藤友詳所長は、さらに気を引き締めます。

「またいつか津波は来る。久慈近海が震源地だった場合、津波はあつという間に襲ってきます。今回と同じ避難では無事では済まないかもしれない。もっと早い避難の徹底が必要です」。

震災によって、意識はさらに高まっています。

もっと早い避難徹底を

日本地下石油備蓄久慈事業所 **大藤友詳** 所長

